化を定義している[1]。「歴史的」を単なる時間として考えるのではなく、人間が経験する現実として理解すれば、そこには空間的な意義（地域性）を含めても良いであろう。人間社会は自ずと慣習を生み出し、それが有形・無形にさまざまに表現されていく。その表現を文化として理解するならば、芸術活動は見える表現とすることができる。絵画・音楽・文学などはどのような時代・地域においても見ることができる。これを狭義の文化と定義する。一方、目に見えない文化も存在する。ある地域や組織の風土・雰囲気・土壌・考え方の傾向・意思決定についての基本的な考え方などが挙げられる。これは、上記の狭い文化に対して広義の文化として認められる。なぜならば、後者は前者に対して決定的な影響を与える一方で、前者の後者への影響は限定的だからである。いずれにせよ、文化という言葉をどの視点・範囲から取り上げるかによって、扱うべき議論は変わってくる。本論では狭義の文化について扱う。

文化（特に狭義の文化）には人間の感性が重要である。それはアカデミズムに代表される理性だけでは捉えられない要素である（感性もそれ自体は分析の対象とはなるが）。感性は個人の情緒に訴えかけ、その感情を動かす。しかし、この感性も個々人としての趣向にはとどまらない。感性は、それを取り巻く社会的な状況・価値観・背景によって作られていくという側面があるからである。一方、感性が文化として受け入れられるためには、その特定の感性を共有できる一定の社会層が存在する必要がある。その社会性は、感性が個々人に互いに独立して属しているという考えを再考させる。むしろ、社会の感性や価値観が個々に影響し、文化活動を誘発していると言える。そしてその個々の活動が再び社会に発信され、その感性や価値観を組み直していく。後に考えていくように、キリスト教文化もそれが生きている社会とは無関係ではない。加えて、文化形成には社会的信頼が不可欠である。キリスト教会が（社会への迎合ではなく）長期的な視点に立った社会的信頼を獲得できるのか否か、これは文化形成にとっても重要な課題である。その意味するところは、教会のメッセージ性への信頼であり、教会の行動に対する信頼である。教会への社会的信頼が

[1] 山崎正一、市川浩編『現代哲学辞典』（講談社、1970 年）538 頁

欠如していれば、その社会の誰もが教会の発信には耳を貸さなくなる。

社会的視点から文化形成を考えると、その過程には多様な要素が複雑に絡まっていることが解る。そして、人間社会が異なれば、慣習とそれが生み出す表現は異なる。時代や地域が異なれば、当然のように文化の内容も違ったものになる。まず、その社会を取り巻く環境の違いを挙げることができよう。人間が住む自然環境は、社会が採用するライフ・スタイルや価値観にとって重要な要素となる。海との関連のない地域の文化は、海をモチーフにした文化を生み出すことはできない。例えば、旧約聖書を見ていくと、古代イスラエルの民は地中海を知っていたが、彼らにとって重要であった律法には海からの影響を見出すことはできない[2]。自然環境に即して生きていくことではじめて人間が生存できるのであれば、社会の「慣習的な機能」である文化が自然の条件から独立して形成されることはない。また、社会の政治状況・経済状況も文化形成には不可欠な要素として入り込んでくる。自然環境に比べれば政治も経済も人間という要素が深く関わってくるが、社会の慣習的要素としての機能は重要である。政治的・経済的体制は人々の価値観を形成し、生活のあり方を決定していく。旧約律法を見ていけば、それが牧畜と農業を基盤にしていることが解る。それは、当時の経済体制が人々の生活を律していく要素の一つであることを示している。

2．キリスト教的文化について

（1）「キリスト教的文化」の定義

この本論の趣旨であるキリスト者・キリスト教会として文化を生み出して育成する可能性について考えるときに、「キリスト教的文化」といった事柄を設定しなければならない。本論では、「ある文化的な創作にあたって、その創作者がキリスト教としての価値観を基礎としていると判断される文化」をそのキリスト教的文化と呼んでおきたい。（創作者がその作品外でキリスト者として

[2] もちろん、旧約聖書には海に関する記述は存在する。例えば、創世記 1:2 や 6 章においては、神による創造の秩序を破壊する宇宙論的な要素として描かれている。